

# 古事記と魏志倭人伝のリンク

伊邪那美・岐は倭国統一の象徴

白崎 勝

## 1、はじめに

伊邪那岐（いざなぎ）と伊邪那美（いざなみ）は、神々の命を受け、「国生み」に向かった。これが古事記が記す、日本の歴史の始まりである。この伊邪那岐、伊邪那美の名が、魏志倭人伝に登場するクニの国名から、一文字ずつ採った名であることを発見した。

## 2、伊邪那岐と伊邪那美の名前と倭国のクニグニ

### 1) 天地（あまつち）初めて開けし時の神々

表1は古事記が最初に記す、神々である。「別天つ神（ことあまつかみ）五柱」は、上段の三柱と下段の二柱を分けて記述しているが、みな独り神として系譜や出自、業績などを記していない。

「神代七代」は、七代の伊邪那岐、伊邪那美が天照大神を生んでいるので、天照大神につながる系譜である。始めの一・二代の神も独り神としていているので、宗家出自の人が代を継いだことが分かる。

表1

<b>別天つ神五柱</b>		
あめのみなかぬし 天之御中主神	たかみむすひ 高御産巢日神	かみむすひ 神産巢日神
うましあしかびひこぢ 宇摩志阿斯訶備比古遲神	あめのとこたち 天之常立神	
<b>神代七代</b>		
くにのとこたち 国之常立神	とよくもの 豊雲野神	うひぢこ 宇比地邇神
		つのぐひ 角杙神
		いもすひぢこ 妹須比智邇神
		いもいくぐひ 妹活杙神
<b>意富斗能地神 — 於母陀流神 — 伊邪那岐神</b>		
おほとのぢ 意富斗能地神	おもだる 於母陀流神	いざなぎ 伊邪那岐神
いもおほとのべ 妹大斗乃辨神	いもあぜかしこね 妹阿夜訶志古泥神	いもいざなみ 妹伊邪那美神

日本書紀は、古事記と同名の神でも異なる文字で記したり、また別名の紹介や、ある書にはこのように記載していると、多くの神々を紹介している。一方、古事記の表記は、漢字で代用しづらい固有名詞を一字一音表記して、日本語の昔ながらの発音が残るよう工夫されているとの評価がある。

## 2) 伊邪那美・岐に秘められた倭のクニグニ

表2は今回の発見をまとめたものである。クニ名は魏志倭人伝に登場する倭のクニ名で、その1文字が伊邪那美・岐の名に対応する。クニの代表は古事記の「別天つ神五柱」の記載順である。

伊邪那美・岐の文字順は、クニの格の上から順に選ばれたと考えられる。また対応する「別天つ神五柱」も古い順でなく、格順に記載されていると考えられるので、次に吟味してみた。

表2

名前	クニ名	クニの代表
伊	伊都国	天之御中主神
邪	邪馬台国	高御産巢日神
那	奴(那)国	神産巢日神
美	不弥(宇美)国	宇摩志阿斯訶備比古遲神
岐	壹岐国	天之常立神

**格順1**－伊都国と天之御中主についての吟味。伊邪那岐の系譜の第一代、国之常立神は天之常立神と、同じ常立神なので伊邪那岐の系譜は、天(海人)の同族と思われる。伊邪那岐の子に天照大神がいることから分かる。伊邪那岐命は国生み後、母国・伊都国の比定地、室見川河口の小戸神宮で禊したと考えるので、伊都国は天である。五柱の最初が天之御中主でこの格順の仮定は維持できる。

**格順2**－邪馬台国と高御産巢日神についての吟味。地図は「奴国の滅亡(安本美典1990)」より借りている。倭国乱当時の墓制・甕棺から出土した鉄製武器の分布図で、この図から、倭国乱は博多湾沿岸、筑紫平野、直方平野領域の戦いと思われる。これを収束するには、博多湾沿岸国に含めて、筑紫平野、直方平野の代表無くしては不可能である。

表にあるクニの内、4クニは博多湾沿岸国なので、残る邪馬台国が筑紫平野と直方平野を、代表していると考え。げんに筑紫平野の北、朝倉市や嘉麻市・田川市に格順2とした高御産巢日神が各所で祀られている。



高御産巢日神は、この広大な地域の代表であるが、伊都国の伊邪那岐の子、卑弥呼(天照大神)が都を置いたと記すように、伊都国を越えることはできない。格順2は順当である。

**格順3**－奴(那)国と神産巢日神についての吟味。奴(那)国は、伊都国と戦った国である。ここを4.5の順位にすれば、戦乱を収束できない。残り三柱のうち、天之常立神は天であるから奴(那)国ではない。宇美国の名には「うまし」の意味があるとして、宇摩志・神を当てた。よって消去法で神産巢日神となり、同神が古事記記載の三番目なので格順3も適合する。

**格順4**－不弥(宇美)国と宇摩志阿斯訶備比古遲神についての吟味。美は女性の名にあっている。不弥(宇美)国は千余戸で、壹岐国三千戸より小さいが、奴(那)国に近く、同国と共に伊都国・邪馬台国と戦った国と考える。神産巢日神の娘・伊邪那美に敬意を表し格順4としたと考える。

**格順5**－壹岐国と天之常立神についての吟味。壹岐国は伊都国と同じ天で、天が格順1にすでに

あり、また伊邪那岐に壹岐の岐の1文字が入り格順5に不服はなかったと考える。

### 3、対応表の意味するところ

図2の意味するところの私見を述べる。

●**名づけの動機** 何故このような、名づけをしたのか？ 魏志倭人伝は記す。「その国は、もとまた男子をもって王としていた。七・八十年、倭国は乱れ相攻伐して年を経る。すなわち一女子を供立して王と為す。名づけて卑弥呼という。」

この相攻伐する戦いをやめ、一女子を供立している。長く続いた戦乱を収束させるため、高御産巢日神と神産巢日神が関係国で話し合うことを提案したと考えた。まず伊都国王家の男子と、奴(那)国王家の女子が結婚し、その子から倭国王を共立する。またその男子と邪馬台国の王家の女子が結婚することで血縁関係を深める案である。

伊邪那岐と伊邪那美の子、天照大神が供立された女王で、魏志倭人伝がいう卑弥呼に該当する。これであれば、一女子が供立された理由が分かる。高御産巢日神と神産巢日神がともに産巢日(むすひ)とあるのは、日神・天照大神を生んだ功績によるものだろう。このような表現は後に、二代目天照大神とされる、豊受大神を生んだ和久産巢日神にも産巢日を適用している。これが新しい国・倭国の歴史の始まりと考えた神々が、二人にクニグニの国名から、一文字を採り、統一の象徴として伊邪那岐・伊邪那美に与えたと考える。

●**メンバー** 戦乱の主な当事国は伊都国と奴(那)国であったと考える。クニの代表は国王と思われるが、伊都国は神代七代の系譜から、於母陀流神(おもだるのかみ)が当時の国王である。しかし、戦いの当事者が話し合いに加われば、まとまらないと考え、天之御中主神が代表を務めたのだろう。

メンバーをみると、魏志倭人伝が記すクニの内、対馬国と末櫛国が無い。この二国は影響力が小さいか、壹岐国と伊都国の兄弟国に挟まれ、ほとんど支配下にあったクニと考える。魏志倭人伝に、末櫛国の官の記載が無いことから納得できる。

投馬国は後に邇邇藝(ににぎ)が天孫降臨して建国した国で、この倭国統一のときには無かったと考える。女王国の南にあり対立していた狗奴国は、話し合いの時点では影響力が無かったか、比定地の熊本平野は地勢的に仲間と認められる関係では無かったと考える。

●**話し合いの場所** 話し合いが行われた場所は、志賀島の志賀海神社と考える。伊邪那岐と伊邪那美は「天の浮橋」に立ったと記していて、「海の中道」は天の浮橋と呼ぶにふさわしい。海の中道の先には志賀島の志賀海神社がある。境内には「海の中道」を望む遥拝所があり、伊邪那岐と伊邪那美を想定したのか、二つの大きな亀石が置かれている。志賀海神社には、国生みから還ってきて伊邪那岐が、禊した際に成った、綿津見三神が祀られていて関係が深い。

志賀島といえば、「漢の倭の奴の国王」という金印が発見された場所として有名である。発見された場所は、志賀海神社から1.8kmで徒歩30分の近い距離にある。しかも海岸にも近い場所である。これは、ひそかに隠匿したとするより、神々の会合のあと、伊邪那岐と伊邪那美が呼び寄せられて、不要となった金印を二人に埋めさせたと考えた方が、状況にあっている。

また志賀海神社には、君が代をうたう「山誉め祭り」が残っている。その中で、対岸の奴(那)国比定地の福岡県庁があるところの地名、千代から船でやってくる姫を、我が君と呼んでいる。このことから、君が代の君は、もともとは伊邪那美命だったと思われる。

●話し合いが行われた年代 倭国乱の期間は漢書の記述から、いろんな議論があるが、二世紀後半には終了した意見が大勢である。この終了時点が上記の話し合いがあった時点か、伊邪那岐の子・天照大神の共立時点かで、10余年の時間差が生まれる。いずれにしても、この話し合いは二世紀後半と考える。

●なぜ「国生み」を始めたのか 当時、北部九州では灌漑稲作が普及した結果、人口が増え土地争となったのが倭国乱と考える。主戦場となった室見川・那珂川間の人達は乱を逃れ、安曇の人達の助けを借り、船で瀬戸内海を東進し、新しい土地の開拓を進めていたと考える。

この状況を二人の産巢日神は、戦乱収束の機会ととらえ、倭国統一を建議したものと考える。選ばれた男女、伊邪那岐と伊邪那美を、いかに結びつけ、また王として育てるかまで腐心したのが、二人を国生みという名の、開拓に送り出すことだったのだろう。神々は、「この漂える国を修め理り固め成せ。」と命じ、クニを挙げ船で東へ出発させた。

#### 4、対応表から導き出されること

図2の対応表から、次のことが導き出される。

- ① 邪馬台国の代表を、高御産巢日神がつとめている。邪馬台国の王だったのだろう。魏使倭人伝が邪馬台国を「女王の都するところ」と記したのは、倭国の都を邪馬台国に置いたのであって、卑弥呼は邪馬台国の王で無かったことが分かる。統一倭国の初代の王だったのである。
- ② また天照大神は、高御産巢日神とともに、邪馬台国の高天原で活動していたので、魏使倭人伝が記す卑弥呼であったことが分かる。
- ③ 筑紫平野を代表するクニが、話し合いに不参加はあり得ない。邪馬台国の高御産巢日神が筑紫平野を代表していることが分かった。このことから、邪馬台国は筑紫平野・直方平野内に限定され、豊前国や南九州の説は否定される。中国・四国や近畿地方などの邪馬台国説も否定される。
- ④ 倭国乱は北部九州の範囲に絞られた。このことは瀬戸内海に多くみられる、高地性集落の存在理由を、邪馬台国近畿説に基づき、卑弥呼共立以前の倭国乱に求めている考古学的説明を改めなくてはならない。
- ⑤ 古事記、日本書記が記す国生みに始まる歴史は、西暦200年の少し前に始まることが分かった。このことから、神武の即位を日本書記の天皇在位年数から遡った、紀元前とする考えは否定される。
- ⑥ また建国の過程論で、二世紀末すでに近畿に邪馬台国があったとする論は、すべて否定される。

#### 5、おわりに

このように、日本の歴史の始まりが、いつ、どこで、どのような理由で、誰によって何をスタートさせたかが、記録されていたこと、そして発見できたことがうれしい。古事記と魏志倭人伝がリンクしたことで、考古学も古事記や日本書紀の神代の記述を無視した研究は、意味をなさなくなった。パラダイム（研究の枠組み）が変わったのである。

以上